# 正岡子規と感染症

太田哲男
桜美林大学名誉教授

Masaoka Shiki and Infectious Disease

OTA Tetsuo
Professor Emeritus, J. F. Oberlin University

キーワード：正岡子規、感染症、結核、墨汁一滴、夏目漱石、蕪村

## 病子規

二〇二〇年一月、日本国内で新型コロナウィルス感染者の存在が確認され、以後、その感染が拡大した。そういう状況下で、近代日本の文学史を想起すれば、感染症である結核によって命を落とした文学者がいかに多かったか、今さらながら印象づけられる。

とはいえ、そういう文学者とその文学との関係も、むろんさまざまである。たとえば、樋口一葉（一八七二－九六）は、肺結核を発病して半年ほどで亡くなった。享年二十四。しかし、その病気が一葉の文学、あるいはその作品自体に大きな影響を与えたとはいいにくい。

それに対し、正岡子規（一八六七－一九〇二）のばあいは、自ら「病子規」と名告っていた[1]し、その病気がかれの作品に大

きく関わっていることは明白である。たとえば、『墨汁一滴』[2]（子規［二〇一八］一〇五頁）（明治三十四年四月二十八日）にみえるよく知られた歌にうかがえる。

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたゝみの上にとゞかざりけり

瓶にさす藤の花ぶさ一ふさはかさねし書の上に垂れたり

これらが、脊椎カリエスとなって病床に横たわる姿勢で子規がみた藤の花を詠んだものであることは歴然としている。病床に横たわる以外の姿勢がとりようもないという状態が、独自の視角を生んだといえよう。また、同書（五月四日）にみえるつぎの歌も同様である。

いちはつの花咲きいでゝ我目には今年ばかりの春行かんとす

夕顔の棚つくらんと思へども秋待ちがてぬ我いのちかも

これらは、自己の死と向きあっていることをまざまざと感じさせる。死と向きあった歌は世に多いとしても、身辺にある植物を詠むことの多かった子規ならではの歌の世界であろう[3]。そういう子規の『墨汁一滴』には、つぎのような箇所がある。

散歩の楽、旅行の楽、能楽演劇を見る楽、寄席に行く楽、見せ物興行物を見る楽、展覧会を見る楽、花見月見雪見等に行く楽、細君を携へて湯治に行く楽、紅燈緑酒美人の膝を枕にする楽、〔中略〕。歩行の自由、坐臥の自由、寐返りの自由、足を伸す自由、人を訪ふ自由、集会に臨む自由、厠に行く自由〔中略〕総ての楽、総ての自由は尽く余の身より奪ひ去られて僅かに残る一つの楽と一つの自由、即ち飲食の楽と執筆の自由なり。〔中略〕アア何を楽に残る月日を送るべきか。（三月十五日）

これを読むと、「歩行の自由、坐臥の自由」とか、「紅燈緑酒美人の膝を枕にする楽」はともかくとして、「人を訪ふ自由、集会に臨む自由」などは、コロナ禍によって大きく制約を受けているので、身につまされるところがある。子規については研究書も汗牛充棟ただならぬものがあり、枚挙にいとまがなく、病気との関連にふれないものはないといえる。しかし、現在の感染症蔓延を念頭に置けば、病気との関連という視点をより強く打ち出し、医学的知見も交えつつ子規の文学的営為をかえりみることには意義があると思われる。そこで、主として『墨汁一滴』『病床六尺』『仰臥漫録』の時代の子規についてみておきたい。

## 子規の病気の回想

子規は、「水戸紀行」の旅（明治二十二年（一八八九）四月）をしたが、五月になって喀血、十日に医師から肺病と診断されたという[4]。その時点から死去までの時間は短いとはいえない。

一八九五年四月に周囲の反対を押し切って日清戦争に記者として従軍し、翌月、帰還の船中で喀血して入院した。そのとき

のことを、ほぼ四年半後に回想した一文「病[5]」がある。

○明治二十八年五月大連湾より帰りの船の中で、［中略］鱶が居る、早く来いと我名を呼ぶ者があるので、はね起きて急ぎ甲板へ上つた。甲板に上り著くと同時に痰が出たから船端の水が流れて居る処へ何心なく吐くと痰では無かつた、血であつた。（子規［一九七五ｂ］三五二頁以下）

その後、結核菌が背骨にも入り、九六年三月、病気は「リウマチ」ではなく脊椎カリエスだと医師から告げられ、手術（一回目）を受けた。術後には、杖を頼りに、ごく狭い範囲ならば歩くことができたようだが、九七年五月には病状が悪化し、一時重態に陥った。その後、いささか快復の方向に向かう。子規は『墨汁一滴』で「執筆の自由」と書いたが、それは、机に向かってではなく、床に横たわって執筆するということであった。

## 子規と結核

ここで、結核についての医学者の知見をみておこう。

青木正和の『結核の歴史』によれば、結核が結核菌の感染によって起こる伝染病と正確に認識されたのは、ロベルト・コッホによる結核菌の発見（一八八二年）以降のことであり、菌が発見されても、その全容が理解されたのは一九二〇年代のこと（青木［二〇〇三］一七頁）だというから、大まかにいえば、明治期には結核についての理解がなかなか行きとどかなかったのはふしぎではないが、感染については子規の時代でも知られていた。

青木は、結核では、感染と発病を分けて考える必要があるという。「予防接種をしていなければ、天然痘ウイルスに感染するとほぼ一〇〇％の人が発病する」が、結核は違う。平均的には、結核の「感染者のうち発病するのは二〇％くらい」であり、「結核に感染しても八〇％の人は病気にならない」（青木、二八頁）とのこと。そのうえ、「インフルエンザや麻疹などに較べると、結核菌の感染はずっと起こりにくい」。

結核は「会話をする程度の距離で接触したときに感染」するのがふつうで、「空気の流れによっては直接接触していなくても感染を受けることがある」（青木、二二頁）という。結核の発症は、多くの場合は早くて五ヵ月後くらいからで、八～一二ヵ月後の発症例が多い。その後、一年をこえても低率ながら発病し、一〇年後、二〇年後に発病する例も見られる。（青木、三二頁）そして、結核菌が「血液の流れに入れば、菌は身体中どこにでも到達できることとなる」。「結核のおよそ八五％は肺結核で圧倒的に多く」、脊椎カリエスは「〇・八％」（青木、二四－五頁）だという。子規はこの脊椎カリエスになった[6]。

## 子規の病状

青木正和は、子規の病状を、包帯のことも含めて、つぎのように説明している。

子規を実際に苦しめたのは、肺結核よりむしろ腰椎の脊椎カリエスだった。

脊椎が結核で侵されると、骨は脆弱になり圧しつぶされ

る。身体を動かせば激痛が走るので、仰臥したままとなる。子規は天井から力綱を下げ、これを握って寝返りをするのが精一杯の病床六尺の生活となる。

子規をさらに苦しめたのは侵された骨から流れ出る膿で、背中と腰の筋肉のあいだを流れて肛門部まで達し（灌注膿瘍）、二つの排膿口が大きく開いていた。毎日流れ出る膿を妹に包帯交換してもらわなければならない。腸結核も加わっていたのだろう。腹痛、下痢もひどかった。（青木、二六－二七頁）

『仰臥漫録[7]』には、一九〇一年十月七日条に、包帯交換のことがつぎのように記されている。

前日来痛かりし腸骨下の痛みいよいよ烈しく堪られず
この日繃帯とりかへのとき号泣多時、いふ腐敗したる部分の皮がガーゼに附著したるなりと
骨の下の穴も痛みあり　体をどちらへ向けても痛くてたまらず（子規［二〇二〇］九八頁）

子規は、「お手伝いさん」はおかず、母・八重と妹・律とともに東京の根岸に住んでいたのだが、『仰臥漫録』によれば、十月十三日午後、母と妹は近所に出かけた。

この家には余一人となつたのである　余は左向に寐たまま前の硯箱を見ると四、五本の禿筆一本の験温器の外に二寸ばかりの鈍い小刀と二寸ばかりの千枚通しの錐とはしかも筆の上にあらはれて居る　さなくとも時々起らうとする自殺熱はむらむらと起つて来た〔中略〕しかしこの鈍刀や錐ではまさかに死ねぬ　次の間へ行けば剃刀があることは分つて居る　その剃刀さへあれば咽喉を掻く位はわけはないが悲しいことには今は匍匐ふことも出来ぬ

というのであって、子規は苦しみのあまり自殺を考えたのだった。この日の『仰臥漫録』に、子規は小刀と錐の絵を書き添えていた。

一九〇二年に入って、麻痺剤使用がふえる。その苦しみのなかで、同年五月五日から、『日本新聞』に『病床六尺[8]』の連載をはじめた。その第一回の記事の前半を引こう。

○病床六尺、これが我世界である。しかもこの六尺の病床が余には広過ぎるのである。僅かに手を延ばして畳に触れる事はあるが、蒲団の外へまで足を延ばして体をくつろぐ事も出来ない。甚だしい時は極端の苦痛に苦しめられて五分も一寸も体の動けない事がある。苦痛、煩悶、号泣、麻痺剤、僅かに一条の活路を死路の内に求めて少しの安楽を貪る果敢なさ、それでも生きて居ればいひたい事はいひたいもので、毎日見るものは新聞雑誌に限つて居れど、それさへ読めないで苦しんで居る時も多いが、読めば腹の立つ事、癪にさはる事、たまには何となく嬉しくてために病苦を忘るるやうな事がないでもない。年が年中、しかも六年の間、世間も知らずに寐て居た病人の感じは先づこんなものです〔以下略〕（子規［二〇一六a］七頁）

六年の間というのは、カリエスと診断を受けて以降ということであろう。『病床六尺』の連載は、子規の死の直前、九月半ばまで続く。

『墨汁一滴』『病床六尺』には、病状を告げる文章が散見され

はするけれども、「阿鼻叫喚の地獄」などほとんど感じさせない筆致の文章が多く並んでいることがまた驚きである。

## 病気と仕事

そういう筆致の文章を可能にしたのが「墨汁一滴」という形式だったといってよい。その形式について、『墨汁一滴』に、つぎのように書かれている。

年頃苦しみつる局部の痛の外に左横腹の痛去年より強くなりて今ははや筆取りて物書く能はざるほどになりしかば思ふ事腹にたまりて心さへ苦しくなりぬ。かくては生けるかひもなし。はた如何にして病の床のつれづれを慰めてんや。思ひくし居るほどにふと考へ得たるところありて終に墨汁一滴といふものを書かましと思ひたちぬ。こは長きも二十行を限とし短きは十行五行あるは一行二行もあるべし。（一月二十四日）

つまり、横たわった状態での執筆であるから、長いものは書けない。しかし、基本的には毎日書く。それが子規にとっては「慰め」でもあり「生けるかひ〔甲斐〕」でもあった。その内容は、「腹にたまりて」いる「思ふ事」で、さまざまな分野の評論だといってよい。

これら随筆の日々の執筆もまた、「面白み」の重要な要素であったに相違ない。そのことは、『墨汁一滴』を書きはじめたときの寒川陽光（鼠骨）宛の書簡に如実に示されている。

僕ハ此頃横腹ガ痛ンデ筆ガ取レンノデソレガ残念デ不愉快デ誠ニツマラヌ。トコロガフト一策ヲ案出シテ毎日「墨汁一滴」トイフ短文（一行以上二十行以下）ヲ書イテ新聞ヘ出サウト思ヒツイテ一昨日ノ夜一文送ツテオイタ。昨夜モ一文送ツテオイタ。ソコデ今朝ハソレガ出テ居ルダロト思フテ急イデ新聞ヲヒロゲテ見ルト、無イ。ツマラヌツマラヌ。何モイヤダ。新聞モヨミタクナイ。〔中略〕欄外デモヨイ。寧ロ欄外ガ善イカト思フ。〔中略〕欄外二欄貸サナイダローカ。若シ僕ニ金ガアツタラ広告文学ナドモ面白イダロー[9]。

（子規［一九七八ａ］六〇四頁以下。傍点は引用者）

加藤周一は、「子規の文学的功績は、俳句や和歌を素材にして、明治の文壇に文藝批評の形式を創りだしたことである。」（加藤［一九八〇］三八〇頁）と的確に指摘し、いずれも『日本新聞』に掲載された子規の『俳諧大要』や『歌よみに与ふる書』に即して、その点を論じた。『墨汁一滴』もその「文藝批評」の延長線上にある。加藤の位置づけの通りではあろうが、寝たきりにならなければ、子規はさらに多彩な方面にその才能を発揮したかもしれない。

たとえば、『子規紀行文集』を編んだ復本一郎がこの本の「解説」で指摘するように、若き子規が日清戦争従軍記者となったのは、「行動する子規」（子規［二〇一九ｂ］二九九頁）のひとつの現れだった。

別の現れとして、子規が野球に熱中した点がある[10]。日本における野球の重要な紹介者でもある子規の『松蘿玉液』には、「ベースボール」についての紹介がある。当時はルールなども普及していないから、野球用語も苦心して訳語を案出した。少し例

示しておこう。

投者（ピッチャー）、直球（ヂレクトボール）、棒（バット）、本基（ホームベース）、打者（ストライカー）、廻了（ホームイン）、除外（アウト）、走者（ラナー）、基（ベース）、死球（デッドボール）（子規［一九七五ａ］二九頁以下）

ここには、現在も使用されている用語もある。哲学用語をさまざまに案出した西周（一八二九－九七）のような役割を、子規は野球用語に関して果たしたといえよう。

このように、「行動する子規」の範囲は広かった。また、子規が若き日に試みた小説の世界に入っていったかもしれない。しかし、病気によって子規の世界は大きく制約された。残ったのは、俳句と短歌の世界、そして随筆の世界だった。

## 「病気を楽しむ」

『病床六尺』（一九〇二年七月二十六日）に中江兆民のことが出てくる。兆民は、〇一年十二月十三日に、咽頭ガンで死去するが、ガンの診断を受け、余命一年半と告げられて、『一年有半』（〇一年）を刊行していた。子規はその著作について言及したわけである。

兆民居士が『一年有半』を著した所などは死生の問題についてはあきらめがついて居つたやうに見えるが、あきらめがついた上で夫の天命を楽しんでといふやうな楽しむといふ域には至らなかつたかと思ふ。〔中略〕居士をして二、三年も病気の境涯にあらしめたならば今少しは楽しみの境涯にはひる事が出来たかも知らぬ。病気の境涯に処しては、病気を楽しむといふことにならなければ生きて居ても何の面白味もない。〔傍点は引用者〕

このように考えていた子規は、病床にあっても、楽しみを見いだそうとした。その楽しみが食べること、俳句を吟じ、短歌を詠むことであった。あるいは、主として江戸時代の画家たちの描いた画集・画譜を開くことであった。子規の病状はいわば螺旋的に悪化していくという状況であったが、好奇心は旺盛だった。『病床六尺』五月二十六日の記事を引く。

〇病に寐てより既に六、七年、車に載せられて一年に両三度出ることも一昨年以来全く出来なくなりて、ずんずんと変つて行く東京の有様は僅かに新聞で読み、来る人に聞くばかりのことで、何を見たいと思ふても最早我が力に及ばなくなつた。そこで自分の見た事のないもので、ちよつと見たいと思ふ物を挙げると、

として、十一項が挙げられている。その一部を示すと、「活動写真」、「自転車の競争及び曲乗」、「動物園の獅子及び駝鳥」、「浅草水族館」、「自働電話及び紅色郵便箱」である。

このように、子規の好奇心は強く、そこに人生の意味をみているかのごとくである。

## 子規と食

子規に残った楽しみが、まず「飲食の楽」であった。命旦夕に迫った子規の病床日録である『仰臥漫録』には、子規の日々

食べたもののリストが連日のように並んでいて、驚嘆させられる。一例を○一年九月十九日の記述にとれば、

朝飯　粥三碗　佃煮　奈良漬
午飯　冷飯三碗　堅魚のさしみ　味噌汁　佃煮
奈良漬　梨一つ　葡萄一房
間食　牛乳五勺ココア入　菓子パン　塩煎餅　飴一つ　渋茶
晩飯　粥三碗　泥鰌鍋　キャベツ　ポテトー　奈良漬
梅干　梨一つ

という具合だが、じつに旺盛な食欲であるし、病床にあるだけの生活では、食事が唯一の楽しみだというのは、よく理解できるところである。また、『墨汁一滴』二月九日条には、「近日我貧厨をにぎはしたる諸国の名物」が列挙されている。「大阪の天王寺蕪、函館の赤蕪、秋田のはたはた魚、土佐のザボン及び柑類、越後の鮭の粕漬」とはじまり、これらに加えて以下、三十余品目がならぶさまは壮観でさえある。そこには、「伊予の鯛の粕漬、神戸の牛のミソ漬、下総の雉」などというものも含まれる。

『仰臥漫録』では三度の食事や間食のことがくり返し記録され、その健啖ぶりに目を見張るのだが、なぜこれほどまでに「食」にこだわったのか。それは、子規にとって、食事が「唯一の楽」（『仰臥漫録』○一年十月二十六日条）だったからであるが、同時に病気への対処法だとして、つぎのように認識されてもいた。

世の肺を患ふる諸君に御注意申候。若し出来るならば、海辺の、空気の善き、暖かな、気候の変動少き、御馳走の喰へる処へ転地して御馳走御喰べ可被成、若しさる栄耀の出来ぬ人ならば御馳走だけにて宜しく候につきどしどしと出来るだけの御馳走御たべ可被成候。滋養物だに沢山詰め込み候へば初期の病は全く癒え可申、末期の病者は命を長め可申候。今日の処ではお医者の薬は甚だ無覚束者に候[11]。

これは、滋養物が病気に対する効果をもつという観点からの話である。だが、それだけではない。「身体の活動の鈍きは即ち栄養の不十分に原因致し候者故此無精を直さんとならば御馳走を喰ふが第一に御坐候。〔中略〕世の中に立つて一定の職業に従事し劇烈なる生存競争に勝たんとせらるゝ諸君には御馳走を勧め申候。御馳走を贅沢の如く思ふは大なる誤にて」という具合で、具体的には「牛をおたべなされと申事に御坐候。牛が無ければ豚にても宜しく豚が無ければ鳥にても宜しく鳥が無ければ魚にても宜しく候。」つまり、「東洋流の粗衣粗食論」は排して、「御馳走主義」を実行しなければならない、というのである。（子規［一九七五b］三七五頁）もっとも、子規の『病臥漫録』に記載された食事の様子をうかがえば、牛肉・豚肉はほとんど見られず、魚の類いが多いように思うが、実態はともあれ、子規の「理念型」は、「御馳走主義」であった。

この考えは、単に食事の話にとどまらず、つぎのような「文学論」にまで及んでいく。

俳句にて申さば元禄は植物性にして天明は動物性に候。芭蕉は味噌的にして蕪村はバタ的に候。実際句の上に現れ候材料に徴しても芭蕉の作には鳥獣の句極めて少きに反して蕪村集中に鳥獣の多き事は他に例を見ず候。（子規［一九

七五ｂ」三七七頁）

これは、食べ物に執着したひとならではの見方であろう。芭蕉と蕪村評価の一面が食べ物のあり方と関連させられているのは、その当否はともかくとして、興味深い。

## 画を見る・描く楽しみ

食べることのほかに、画をながめることは病床の子規にとって大きな楽しみであったし、画を描くことも同様であった。『病床六尺』に、

○枕許に『光琳画式』と『鶯邨画譜』と二冊の彩色本があつて毎朝毎晩それをひろげて見ては無上の楽として居る。ただそれが美しいばかりでなくこの小冊子でさへも二人の長所が善く比較せられて居るのでその点も大に面白味を感ずる。（六月八日）

とある。『鶯邨画譜』は酒井抱一の画譜であるが、『光琳画式』ともども、その画像はインターネット上での閲覧が可能になっている[12]。

病床で画をながめる話は、『病床六尺』に散見される。たとえば、虚子とともに画帖をながめて楽しんだ話が出てくる。ある日に眺めた画帖に含まれていた画家は、呉春、応挙、南岳、文鳳、抱一、蘆雪である。そして、南岳と文鳳の画合せをしている『手競画譜』に言及し、文鳳のほうを評価している。（五月十二日）また、論は文晁と崋山の画の比較にも及んだ。（五月十三日）いずれも、江戸時代の画家・絵師たちである。

## 残された楽しみ・人びととの交流

飲食の楽しみが失われたとき、子規に何が残ったか。数少ない楽しみは、客から話を聞くことだと『病床六尺』にある。

情ある人我病床に来つて余に珍しき話など聞かさんとならば、謹んで余はために多少の苦を救はるることを謝するであらう。余に珍しき話とは必ずしも俳句談にあらず、文学談にあらず、宗教、美術、理化、農芸、百般の話は知識なき余に取つて悉く興味を感ぜぬものはない。ただ断つて置くのは、差向ふて坐りながら何も話のない人である。（六月二十一日。傍点は原文）

ここを読めば、子規の好奇心がじつに広範に及んでいたことがうかがえるではないか。

一九〇〇年の十一月十八日、子規は伊藤左千夫（幸次郎）に、闇汁会開催の手紙を送り、その書状を回覧するよう依頼した。（電話がなければこういう手法になるだろう[13]。）この手紙の冒頭に「廻章」として十名と「其他歌会諸君」が連記されている。文面は、

拝啓　来る十一月二十五日（日曜日）午後三時より草庵に於て鶏頭闇汁会相催候間御光来被下度候御光来之節は安直奇抜なる汁の実（場合ニヨリ汁ノ実以外ノモノニテモ）御携帯有之度候也　汁ノ実八十銭以下他ニ会費ナシ（子規「一九七八ａ」五七五頁以下）

とあり、その後ろに「草庵飲食会会規」が付けてある。以下の四項目、つまり、「安直なる事」、「ウマキ事」、「珍しき事」、「趣

向ある事」のうち少なくとも二項目に該当することが必要だというのであった。「豪華」な食事ではないけれども、楽しさあふれる集まりであったのだろう。実際には、この闇汁会は二十五日にではなく、二十三日に十人ほどの参会者を得て開催された。まさに、「病気を楽しむ」雰囲気であった。

このように生きた子規。そこには、俳句や短歌の仲間たちがいた。そうであればこそ、子規の看護の輪番制などということが成り立ち得たといわなければならない。

『病床六尺』〇二年七月三十一日条、八月八日条に、「左千夫の番」という意味のことばが出てくる。同年一月以降、子規の病状を考慮して、「看護輪番を設けることになり、左千夫、碧梧桐、虚子、秀真（ほずま）、鼠骨（そこつ）、義郎（ぎろう）の諸氏が交々（こもごも）その任に当った。午後から出かけて行って、深更まで病床に侍（じ）するのを例とした」（柴田［二〇一六］三〇四頁）という。

輪番制が成り立つ前提には、むろん子規の抜群の文学的能力があった。そこに引きつけられる俳句や短歌の仲間たち、さらには、俳句・短歌の愛好者たち。子規は、仲間の句や歌に対して、しばしばはげしい批判のことばを投げかけた。しかし、周囲の仲間も、ただその批判を受けているだけではなく、反批判をためらわなかった。そのような人間関係が独特の世界をつくっていた。そうした人びとに囲まれて、子規は生きたのだった。

とはいえ、こうした環境では、病気の感染の問題が大きく浮上する。そこで、子規は結核という病気をどのようにみていたのかを検討してみよう。

## 感染症についての意識

子規は、俳誌『ホトトギス』所収「消息」（第三巻第四号、明治三十三年一月十日）において、つぎのように書いている。

肺病の事に就いて少し申述度（もうしのべたく）候。肺病の伝染病たる事は今更知らぬ人もあるまじく又私の肺患者たる事も皆様先刻御承知の事と存候。扨（さて）此肺病と申すは無論肺結核の事にて、其伝染は結核菌の媒介による者、其結核菌は肺患者の喀痰の中に存ずる者とか申候。故に肺病の伝染を防ぐは喀痰の消毒を第一と致し候。乍併（しかしながら）肺患者の唾液にも結核菌ある由申候。〔中略〕唾液の附着したる器物を消毒するの必要を生じ申候。（子規［一九七五b］三八三―四頁）

食器の消毒が必要だし、さらには「寝具衣服其他身辺に触るゝ器具」はすべて「黴菌の付着し居る者と認定せざるべからざる次第」だというのである。

だから、「患者の食器其他の器具を他人の物と別にする事を医師は命令致候（いたしそうろう）。」ということになり、来訪者は、肺病患者の家で出された食べ物を食べてはいけないと医師は命じているというのである。「昔は肺病を以て遺伝病と致し候ひしも、伝染病と定まりし今日にては、肺患者の子を親に接近せしめざる様な残酷なる事」もしなければならない。

また、患者の食器は、他の人の食器と区別しなければならず、それを拭う布も区別し、さらには、茶碗皿の類いは時々煮沸消毒する必要がある。

このようなことを子規はこまごまと記した。つまり子規は、

自分の結核が周囲の人に伝染する可能性があることをよく認識していたのである。しかも、「肺病も初期の程は黴菌少なけれども私などの如き古株は余程多き由に御坐候。」と、子規は、自身の病気が「古株」であると十分に認識していた。（子規［一九七五ｂ］三八六頁）

では、「肺患者は社会と交際を絶ちて、孤島の流人の如く独りボツチにて暮らさざるべからざるか」といえば、これは疑問である。しかし「試に一歩を譲つて諸君の来訪ありとするも共に物を喰ひながら快談するの一事無くば病人の楽は過半を殺がれ可申候。」と子規は書く。そして、子規庵への訪問者たちには、茶菓を供するけれども、それを喫するかどうかは来訪者の「決断に任する」とし、来訪者に供する食事は弁当屋に依頼したものであるから安全だといったことも書いている。この「消息」という一文は、『ホトトギス』に掲載されたのであるから、子規庵への訪問者たちは、結核に関する事情はよくわかっていたはずである。わかった上で、子規庵への訪問をする人びとは多かった。

子規と同居していた母と妹には、少なくとも子規存命中に結核を発症したという形跡はみえない。弟子筋の人びとにも、発症はあまりなかったように思われる。

## 友人たちと子規のユーモア

病床にある子規のもとに、おそらくは結核の感染の心配をしつつも、多数の友人や弟子などが集まってきた。松山以来の仲間もいたし、子規の『獺祭書屋俳話』などの俳論書に感銘して子規の弟子となった人びともいた。そのような人びととの交わりも、子規にとっては、大いなるなぐさめになった。集まって来た理由は、『蕪村句集』輪講とか句会、さらには歌会などがあったからである。たとえば、一九〇〇年十二月二十四日には、その日が蕪村忌[14]だったということがあり、三十人を超える人びとが子規の住まいに集まった。いろいろな人が近寄ってきた理由としてもっとも重要なことは、俳句仲間が相互批判を通じての技量の向上に励み、それを喜びとしていたことであろう。また、他の理由に、子規のユーモア精神という点もあったと思われる。その「ユーモア精神」を、ふたつの例で示しておこう。

【1】『墨汁一滴』〇一年五月二十一日条の閻魔大王の話。

余は閻魔の大王の構へて居る卓子の下に立つて

「お願ひでござりまする。（以下、閉じ括弧は表記されていない。）

といふと閻魔は耳を擘くやうな声で

「何だ。

と答へた。そこで私は根岸の病人何がしであるが最早御庁よりの御迎へが来るだらうと待つて居ても一向に来んのはどうしたものであらうか来るならいつ来るであらうかそれを聞きに来たのである、と訳を話して丁寧に頼んだ。すると閻魔はいやさうな顔もせず直に明治三十四年と五年の帖面を調べたが、そんな名は見当たらぬといふ事で、閻魔先生少しやつきになつて数珠玉のやうな汗を流して調べた結果、その名前は既に明治三十年の五月に帳消しになつて居

るといふ事が分つた。

ということで、そのとき迎えに行った「五号の青鬼」を呼び出して事情を聞くと、根岸の道が曲がりくねって家がよく分からず引き返したという話。その後、「十一号の赤鬼」が迎えに行ったが、道が狭くて「火の車」が通行できず、諦めたという次第だったという。

閻魔の傍らで、ことの次第を聞いていた地蔵様が、「それでは事のついでにもう十年ばかり寿命を延べてやりなさい」といったので、余はあわてて

「滅相なことを仰しやりますな。病気なしの十年延命なら誰しもいやはございません、この頃のやうに痛み通されては一日も早くお迎への来るのを待つて居るばかりでございます。この上十年も苦しめられてはやるせがございません。

閻王は直に余に同情をよせたらしく

「それならば今夜すぐ迎へをやろ。

と話が展開する。子規は「いつとなく突然来てもらひたいものですな」と答える。「コロリ」と往きたいという話だが、病苦のなかでこのようなユーモアを子規は発揮していた。

【2】『病床六尺』○二年八月二十三日条の最後に、子規の家を「孫生、快生の二人」が訪問したという話が出てくる。翌二十四日条に話は続き、「実は渡辺さんのお嬢さんがあなたにお目にかかりたいといふのですがと意外な話」を持ち出した、として話が展開する。子規がお目にかかりたいと応じると、じつはそのお嬢さんはこちらに来て待っているのだといい、子規の承諾を得るや、孫生は「すぐその渡辺のお嬢さんといふのを連れて這入つて来た」という次第。そこで、いろいろ話をした。子規は、この「お嬢さん」をみて「恍惚」とした。そして、つぎのような子規のことばが続く。

帰りかけて居る孫生を呼び戻して私かに余の意中を明してしまふた。余り突然なぶしつけな事とは思ふたけれども余は生まれてから今日のやうに心をなやました事はないので、従つてまた今日のやうに英断を施したのも初めてであつた。孫生は快く承諾してとにかくお嬢さんだけは置いて行きませうといふ。

ここを読んで、いったいどういう展開になるのだろうと思っていると、最後にどんでん返しが来る。なんと、「お嬢さんの名は南岳艸花絵巻。[15]」

この記事から一週間ほど後の八月三十一日条に、渡辺南岳の草花絵巻が枕元に置かれ、「朝に夕に、日に幾度となくあけては、見るのが何よりの楽しみで、ために命の延びるやうな心地がする」と、子規は書いている。生きることの意味を見出していたともいえよう。

## 子規と漱石

むろん、周囲の人びととの「会話の楽」とか、「ユーモア精神」ばかりがあったのではなく、苦しみにも甚大なものがあった。その点を、子規・漱石往復書簡にみてみよう。

ふたりは、ともに一八八四年（明治十七年）に東京大学予備

門に入学したが、交友が始まったのは、八九年一月頃だった。漱石が松山に赴任した九五年四月、前述のように、子規は日清戦争従軍記者となった[16]。五月に帰国途中の船中で喀血して神戸病院に入院。八月、ふるさとでもある松山に向かい、同月二十七日、漱石の勧誘で漱石が借りていた家に同居した。漱石との同居期、「連日の句会」があり、漱石もしばしば運座に加わった。この間、漱石との同居は五十日ほど。翌年四月、漱石は松山中学を辞し、熊本の第五高等学校に転任、熊本に四年余りをすごした後の一九〇〇年（明治三十三年）九月、イギリスに向かう。

一九〇〇年、子規が漱石に送った長文の手紙（二月十二日）は、痛切をきわめるもの。その一部を引こう。（漱石・子規［二〇二〇］三五七頁以下）

例の愚痴談だからヒマナ時に読んでくれ玉へ。人に見せては困ル、二度読マレテハ困ル。〔中略〕イザ書カウトスルト客ガ来ル。昼間ハ来客ノタメニ全ク出来ず、これは毎日同じ事也。夕刻ヨリ熱ガ出ル。時候ガヨケレバ熱イトテ構フタ事ハナイ。徹夜シテデモ熱ヲ押ヘテデモ書ク。ソレガナサケナイ事ニハコノ頃ノ寒サデハトテモ出来ヌ。現ニ只今モサシタル熱ガナイヤウダカラ原稿書カウ今夜ハ徹夜デモスルゾト大奮発シテ先ヅ浣腸ト繃帯取替トヲスル（コノ二事ガ老妹ノ日々ノ大役ダ）。〔中略〕

『日本』ハ売レヌ、『ホトトギス』ハ売レル。陸氏ハ僕ニ新聞ノコトヲ時々イフ〔中略〕僕ノ愚痴ヲ聞クダケマジメニ聞テ後デ善イ加減ニ笑ツテクレルノハ君デアラウト思ツテ君ニ向ツテイフノダカラ貧乏鬮引イタト思ツテ笑ツテクレ玉へ。

ここに、「昼間ハ来客ノタメニ全ク出来ず」とある。子規を軸として巻き起こされた俳句熱が、ブームともいうべき状況になっていた結果でもあった。『子規全集』第二十二巻の資料「子規門俳句結社一覧」によれば、北海道から鹿児島まで、結社の記載がないのは佐賀県・沖縄県のみという広がり具合で、朝鮮、台湾からシベリア、ロンドン、パリにまで及んでいた。そういう俳句熱の中心に子規庵・根岸庵があった。

『ホトトギス』は、一八九七年一月に松山で創刊され、その後、九八年十月、拠点を東京に移し、編集の中心を虚子がにない、子規が加勢した[17]。そういう経緯もあって、一九〇〇年はじめの時点では、俳句愛好者は、『日本新聞』よりは『ホトトギス』を選んだ、と思われる。子規は『日本新聞』の社員であったから、日本新聞の社長であった陸羯南からすれば、子規にはもう少し『日本新聞』での原稿執筆を増やしてほしかったことであろう[18]。

話を漱石・子規往復書簡にもどす。漱石がロンドンに行ったあとの〇一年十一月六日、ロンドンの夏目金之助に送られた手紙の一節。

僕ハモーダメニナッテシマッタ、毎日訳モナク号泣シテ居ルヨウナ次第ダ、〔中略〕イツカヨコシテクレタ君ノ手紙ハ非常ニ面白カッタ。近来僕ヲ喜バセタ者ノ随一ダ。〔中略〕君ノ手紙ヲ見テ西洋ヘ往タヨウナ気ニナッテ愉快デタマラヌ。〔中略〕

僕ハトテモ君ニ再会スルコトハ出来ヌト思ウ。万一出来タトシテモソノ時ハ話モ出来ナクナッテルデアロー。実ハ僕ハ生キテイルノガ苦シイノダ。〔中略〕
書キタイコトハ多イガ苦シイカラ許シテクレ玉エ。

死期が迫っていると自覚していた子規の脳裏には、松山の漱石の住居に同居し、俳句の集まりで楽しんでいたことなどが駆けめぐっていたに相違ない。

翌年九月十七日、『日本新聞』に子規の「病床六尺」の最後の記事が掲載された。その末尾に、「肺病」でなく「俳病」を詠む芳菲山人（西松二郎）のつぎのような一首が引かれた。

俳病の夢みるならんほと、ぎす拷問などに誰がかけたか

「ほと、ぎす」とはむろん子規のこと。病は拷問のごとくだと、周囲もみていた。この記事の翌々日十九日、死は突然子規のもとを訪れた。享年三十四。

子規の死を伝えられた漱石は、ロンドンから高浜虚子宛てに手紙（十二月一日）を送った。その一節。（漱石・子規［二〇二〇］四二〇頁以下）

小生出発の当時より生きて面会致す事は到底叶ひ申間敷と存候。これは双方とも同じ様な心持にて別れ候事故今更驚きは不致、只々気の毒と申より外なく候。但しかかる病苦になやみ候よりも早く往生致す方或は本人の幸福かと存候。

このように認めた漱石は、書簡末に「倫敦にて子規の訃を聞きて」として五句を添えた。そのうちの二句。

手向くべき線香もなくて暮の秋
きりぎりすの昔を忍び帰るべし

その数日後の十二月五日、漱石はロンドンを発って帰国の途についた。

## おわりに

『墨汁一滴』『病床六尺』『仰臥漫録』をみると、子規の病状は、必ずしも直線的に悪化しているわけではなく、いわば小休止の状態の時期もあったように思われる。闇汁会とか子規のユーモアとして記した記述は、その小休止状態のときであったのかもしれない。それに対し、漱石への訴えの手紙は、絶望的な苦しみのなかで書かれたようにみえる。

子規はたしかに、病気に苦しみつつも食べること、画をみること、友人たちと語りあうこと、「墨汁一滴」の短文を書くことに慰めあるいは楽しみを見出そうとした。その軌跡は読む者の心をうつ。病苦のなかにあっても、人間の精神はどこまで高揚が可能なのかを示す、偉大さの例のようでもある。

しかし、病状は悲惨の極みであった。その困難は病人本人にとどまらない。重篤な病の子規の世話をする母と妹の負担や困難はじつに大きかった。にもかかわらず、子規は、母親に対してはともかく、妹の律に対しては、批難のことばを『仰臥漫録』

に書きつけている（たとえば、〇一年九月二十日）が、そのことばには眼を覆いたくなる。

律（りつ）は理屈づめの女なり　同感同情のなき木石（ぼくせき）の如き女なり　義務的に病人を介抱することはすれども同情的に病人を慰むることなし

このような偉大と悲惨の記録が、子規の作品として残された。

## 注

1　子規が自らを「病子規」と記した例として、明治二十九年（一八九六）三月十七日付の虚子宛書簡（高浜虚子［二〇〇二］六四頁。また、子規［一九七八ａ］一九頁）をあげておく。

2　『墨汁一滴』岩波文庫、一九二七年第一刷、二〇一八年第五五刷。新聞『日本』に連載。なお、以下においてはこれを『日本新聞』と表記する。『墨汁一滴』は、『日本新聞』に明治三十四年（一九〇一）一月十六日から七月二日まで連載。以下では、『墨汁一滴』からの引用は、掲載月日のみを文中に示すこととする。この小論で引用した数冊の現行の岩波文庫版では、漢字の旧字体を新字体に直し、仮名遣いを旧仮名遣いのままとしつつ、漢字旧字体を一部で残している。この小論もそれにしたがったが、新字体に改めたところもある。

3　同じ一九〇一年作の子規の句に、類似の発想のものとして、「柿くふも今年ばかりと思ひけり」「糸瓜さへ仏になるぞ後るゝな」などがある。（子規［二〇一九ａ］二八〇－二八一頁。）

4　正岡子規［一九七八ｂ］には、五〇〇頁を超える詳細な子規年譜が収められている。年譜に関連することは、いちいち注記しないが、基本的にこの年譜に依拠する。

5　子規「病」は、子規［一九七五ｂ］所収。初出は、『ホトトギス』第三巻第三号、明治三十二年十二月十日。以下、『子規全集』などからの引用に際しては、漢字の旧字体は新字体に直し、仮名遣いは旧仮名遣いのままとするのを原則とするが、漢字旧字体を一部で残し、踊り字などは適宜現代ふうに手直しし、適宜ルビを付けるなど、「原則」も必ずしも徹底させていないことをお断りしておく。

6　脊椎カリエスで思い出すのは、梶井基次郎の作品「冬の日」（一九二七年）で、主人公の堯の「弟は脊椎カリエスで死んだ。そして妹の延子も腰椎カリエスで、意志を喪った風景のなかを死んで行った。」（梶井［二〇一九］一六五頁）と描かれているところである。肺結核以外の結核できょうだいが死ぬというのは、珍しいことであったのであろう。

7　『仰臥漫録』岩波文庫、一九二七年第一刷、二〇二〇年第六七刷。『仰臥漫録』は、子規の生前には公開されなかった。その書き始めは明治三十四年（一九〇一）九月二日で、十月二十九日まで続く。その後に中断があり、翌年三月に三日分が書かれ、そして同年六月下旬から七月末まで、いわば麻痺剤服用日記になっている。この服用日記の期間は、『病床六尺』の時期と部分的にだが重なる。以下、『仰臥漫録』からの引用に際しては、日付を示す。

8　『病牀六尺』岩波文庫、一九二七年第一刷、二〇一六年第七二刷。『病牀六尺』は、『日本新聞』に明治三十五年（一九〇二）五月五日から九月十七日まで連載、途中の五月に八日分の休み、九月に一日分休んで掲載された。岩波文庫では「牀」が使用されているが、ここでは「床」と表記する。

9　子規［一九七八ａ］六〇四－六〇五頁。明治三十四年一月十五日、寒川洋光宛書簡。

10　子規［一九七七］グラビアに、「野球姿の子規」（明治二十三年）の姿がみえる。

11　子規「消息」『ホトトギス』第三巻第四号、明治三十三年一月十日（子規［一九七五ｂ］三八七頁）。

12　『光琳画式』はＡＲＣ古典籍ポータルデータベースで、『鶯邨画譜』

は国会図書館デジタルコレクションで、それぞれその画像を閲覧できる。

13 東京・横浜市内及び両市間の電話交換の開始は一八九〇年十二月。『近代日本総合年表』第四版、岩波書店。

14 子規庵での蕪村忌は、明治三十年（一八九七）十二月二十四日が最初だった。「旧派の俳人によって営まれる芭蕉忌に対し、新に蕪村忌を修する」ことによってその旗幟を鮮明にしようとしたのだったという。（柴田［二〇一六］一九五頁）なお、子規とその流派の蕪村観を批判したものに、萩原朔太郎『郷愁の詩人与謝蕪村』（一九三六年）がある。

15 『南岳艸〔草〕花絵巻』は、渡辺南岳の作品。ウェブサイトで閲覧可能。

16 子規の従軍については、子規の「従軍紀事」に述べられている（子規［二〇一九b］二一八頁以下）。碧梧桐は、従軍が子規の病状を深刻化させ、寿命を縮めたものとみていた。（河東碧梧桐［二〇〇二］二六一頁以下）

17 虚子「子規居士と余」（虚子［二〇〇二］八三頁）では、東京で刊行しはじめた『ホトトギス』は、「初版千五百部が瞬く間に売切れて五百部再版し」、「第四号以下は千二、三百から千四、五百に殖えて行つたように記憶する」とし、「雑誌としては成功」としている。

18 陸羯南「一藝に秀でたる人」（碧梧桐［一九九三］六頁）は、子規を取りまく人間関係のカナメに子規の「人格」を見て、つぎのように書いていた。「子規が文壇に出陣してから僅に十年にて世を去つたのだが、十年間のその七年は病床の上で暮した、それで世を風靡した勢力といふものは学問藝術の力ではなく、全く其の人格の超凡な証拠である」。

## 参考文献


青木正和［二〇〇三］『結核の歴史』講談社

粟津則雄［一九八二］『正岡子規』朝日新聞社

大岡信［一九九五］『正岡子規』岩波書店（岩波セミナーブックス）

梶井基次郎［二〇一九］『檸檬』新潮文庫

加藤周一［一九八〇］『日本文学史序説 下』『加藤周一著作集』5、平凡社

柄谷行人［二〇〇九］『近代日本文学の起源 原本』講談社文芸文庫

河東碧梧桐編［一九九三］陸羯南「一藝に秀でたる人」『子規言行録』（政教社版、昭和十一年）、日本図書センター〔復刻〕

河東碧梧桐［二〇〇二］『子規を語る』岩波文庫

柴田宵曲［二〇一六］『評伝正岡子規』岩波文庫

高濱虚子［一九七三］『定本高濱虚子全集』第十三巻、毎日新聞社

高浜虚子［二〇〇二］『回想子規・漱石』岩波文庫

坪内稔典［二〇一七］『正岡子規』岩波新書

夏目漱石・正岡子規［二〇二〇］『漱石・子規往復書簡集』和田茂樹編、岩波文庫

萩原朔太郎［一九八八］『与謝蕪村』岩波文庫

正岡子規［一九七五a］『松蘿玉液』『子規全集』第十一巻「随筆一」、講談社

正岡子規［一九七五b］『子規全集』第十二巻「随筆二」、講談社

正岡子規［一九七七］『子規全集』第十八巻「書簡一」、講談社

正岡子規［一九七八a］『子規全集』第十九巻「書簡二」、講談社

正岡子規［一九七八b］『子規全集』第二十二巻「年譜　資料」、講談社

正岡子規［二〇一六ａ］『病床六尺』岩波文庫
正岡子規［二〇一六ｂ］『獺祭書屋俳話・芭蕉雑談』岩波文庫
正岡子規［二〇一八］『墨汁一滴』岩波文庫
正岡子規［二〇一九ａ］『子規句集』高浜虚子選、岩波文庫
正岡子規［二〇一九ｂ］『子規紀行文集』復本一郎編、岩波文庫
正岡子規［二〇二〇］『仰臥漫録』岩波文庫